

# ななかま

水無月の 鯉の背びれは 湖面なり  
サンダーと 赤子には勝てぬ 運動会

## プリンストン日本語学校は人種差別を行いません。

本校はすべての人に開かれ、誰でも日本語を学ぶことができる学校です。思想や信条、男女、人種などによるあらゆる差別を認めません。

私たちは、日常的に敏感に、差別に対して厳しい目を向ける必要があります。人を本人の責任によらないことで差別したり、差別されたりしないように、日頃から努めていきたいと思ひます。

差別を見逃さないために、人権には常に敏感でありたいと思ひます。

## マスコットの募集！ (IT 広報係)

プリンストン日本語学校のマスコットを皆さんに募集します。夏休み明けから学校の HP が変わるので、広く学校新聞やホームページ等で活躍するマスコットを募ります。アイデアをお寄せください (締切は9月9日)。

## 作品募集！

中高生のためのエッセイコンテスト (プリント配布)  
硬筆書写コンクール (次のアドレスでダウンロードできます <http://www.nyseikatsu.com/?cat=64>)

色々なコンテストに応募することで、言語や創作への意識が集中し能力が向上するので、積極的に挑戦してみましょう。

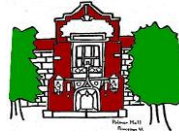
## 「子どもの脳を休ませるな！」

子育ての結論は「親のようになる」、ことだと考えています。どんなに口先で子どもに立派な指導をしても、子どもが親から心底学ぶのは、親の普段の振る舞いなのです。子どもは親をまるで空気のように、自分の体の一部であるかのように感じている時期に、ほとんどの情緒的領域は形成されます。

そこで日本語です。本校に通う子どもたちの日本語環境は、家庭差はあれ、十分とは言えません。そして年数と共に生活の中に英語が占めてきます。そんな環境下でバイリンガルを目指すには、親の並々ならぬ努力が必要です。この時期に日本の学校に体験入学させる。本の読み聞かせなどを通して読書が好きになるように工夫する。これらの努力は、親の本気さにかかっています。特に小学校の中学年までの数年が勝負だともいわれます。

そして、バイリンガルになるためには、本人が日本好きにならなければなりません。

## プリンストン日本語学校(補習校部)



平成24年度 No.10号

平成24年 6月10日

文責 長尾重範

## 行事予定表

6月17日 漢字検定試験

JASL スピーチコンテスト、卒業式

6月24日の次の授業日は8月19日です。



## 「プリンストンの運動会」(日本にいた私へ)

校長のあなたは運動会をなぜするのか自問してきましたが、明治に始まった運動会が連綿と続けているのは、それなりに効果が期待できるからであると思ってきましたね。それでも、先生方が長時間指導して作り上げる運動会にどれほどの教育的効果があるのか疑問に思うところもありました。私の知らないその昔の軍事教練で集団的にきびきびとした行動が求められたように、集団行動ができる生徒は褒めてもらえるのです。

アメリカの学校で学んでいる生徒たちは運動会を知りません。アメリカでは日本で行っている運動会の効果を全く評価していません。生徒たちが高い評価を得られるのは、独創性があるか、独立して行動できるかであって、画一的に行動できるかどうかではないのです。

日本では地域の方々や運動会を評価する場合に、一糸乱れない行進ができていればよく訓練していると高い評価をしてくれます。悪ふざけなどあろうものなら先生はどんな指導をしているのかと苦言を言ってこられました。外見がきちんとできている生徒は安心かという、決してそうとは言えないのですけどね。

プリンストンで行われた先週の運動会は、アメリカにいる私を驚かせました。練習時間が1時間ほどしかないのに、競技に対して前向きで、一人一人が楽しんでいました。応援する人々も自由な形で行きます。形式ばらないで自由に行っているけれども「競走」と「協力」という運動会の狙いに沿った行動ができていました。高校生が全体のお世話を積極的に行っているという風景も、頼もしい気がしました。

教育の本来の目標に照らして考えるときに、運動会はこのようにあるべきだと思います。